

構成的グループエンカウンターが学校組織風土や 教師の職務活動、協働的効力感に及ぼす影響

大関健道（千葉県野田市立みずき小学校）

吉村春美（東京大学大学院学際情報学府博士課程）

キーワード：構成的グループエンカウンター、学校組織風土、協働的効力感

1. 研究の背景

学校を取り巻く環境が複雑化・多様化する中で、様々な課題に対応していくためには、教職員の連携・協働を基盤とした自律的な学校運営が不可欠となっている。学校の協同の規定要因として、校長のリーダーシップや教員同士の人間関係・信頼関係の効果が明らかになっている。しかし、学校現場における教職員の多忙感や負担感は増すばかりで、お互いの人間関係や信頼関係を育む時間的・精神的な余裕をもつことが難しい状況にある。

このような学校現場の状況の中、中学校の教諭、教頭、校長及び教育行政職の経験を有する校長である大関が、初めて小学校の校長として小学校に着任し、小学校の学校組織としての問題点として、「学級担任制」と「教職員の人的配置の少なさ」が要因となって生み出されている連携・チームワークの困難さとそれに対する教師の意識の希薄さを感じた。

そこで、その問題点を改善するために、校長である大関自身が、構成的グループエンカウンター（SGE）による教職員同士の人間関係・信頼関係づくりを試みた。本研究では、日々の学校運営の中に、教職員間の人間関係や信頼関係の質を高めるような活動を埋め込むことによって、学校組織の連携・協同・チームワークにどのような影響が及ぼされたのかについて、明らかにしたいと考えている。

2. 研究の目的

教職員同士の人間関係・信頼関係を改善することを目的として実施した構成的グループエンカウンターが、教職員にどのような影響を及ぼしたのかについて、明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 調査対象

千葉県公立A小学校教職員：28名

(2) 構成的グループエンカウンターのエクササイズの実施について

①実施時期

- 第1回：2014年8月26日（夏季校内研修会）、
- 第2回：2014年10月10日（前期終業式の午後）
- 第3回：2014年12月24日（冬季休業前日）
- 第4回：2015年3月24日（平成26年度修了式の午後）

②実施エクササイズ

第1回：「2人組、4人組」、「身振り手振り新聞紙の使い道」、「冬山からの脱出作戦」、「ありがとうカード」、「仲間を支え、仲間を支えられる体験」

第2回～第4回：「ありがとうカード」

(3) 質問紙調査実施時期

第1回：2014年7月中旬～下旬、第2回：2014年12月下旬、
第3回：2015年3月下旬

(4) 質問紙調査内容（6件法）

- ①職場風土認知：8項目（協働的職場風土：4項目、同調的職場風土：4項目）
- ②職務活動認知：15項目（学校組織活動に関わる教師同士の交流及び学年間の連絡調整に関する認知：4項目、教師の職務意欲と教育活動認知：3項目、教師の役割行動認知：4項目、学年主任・生徒指導主任・研究主任等のリーダーシップ：4項目）
- ③協働的効力感の認知：18項目（支え合いの自覚：5項目、学校改善への意欲：5項目、普段のコミュニケーション：4項目、管理職との協働：4項目）

(5) インタビュー調査について

- ①対象：学年主任4名
- ②実施時期：2015年3月25日
- ③インタビューアー：本研究の共同研究者である吉村が担当
- ④質問項目

【ア】：構成的グループエンカウンターのエクササイズ「ありがとうカード」の実施は、あなたにとってどのような経験でしたか？どんなことを感じましたか？

一番印象に残っている出来事はどんな出来事ですか？それはどうしてですか？

【イ】：「ありがとうカード」の実施によって、学校や職員室の雰囲気や人間関係などにどのような影響があったでしょうか？あれば、具体的に教えてください。なければ、その理由もお聞かせください。

4. 結果

分析結果と考察については、大会当日に発表させていただく。

【文献】

- ・浜田博文 1991 「学校改善をめぐる教員・校長・教育委員会の意識構造-改善を隘路に陥れるもの」日本教育経営学会紀要(33), pp. 71-86.
- ・渕上克義・西村一生 2004 「教師効力感と形成要因及びバーンアウトとの関連に関する研究」『教師学研究』5・6, pp. 1-13.
- ・渕上克義 2005 『学校組織の心理学』pp. 97-32. 第5章「教師集団」
- ・吉村春美・木村充・中原淳 2014 「校長のリーダーシップが自律的学校経営に与える影響過程-ソーシャル・キャピタルの媒介効果に着目して-」日本教育経営学会紀要(56), pp. 52-67.